

信仰のない私を お助けください

マルコによる福音書9章14～29節
2023年2月12日
松田 基子 師

神様が人間に最も求めておられるもの、
『それは神様に対する絶対的信頼、
すなわち信仰です。』

聖書はその事を教えています。創世記3章には、人間が罪を犯したことが記されていますが、罪は人間の祖が、誘惑者の言葉に惹かれ、神様の言を疑ったところから起こりました。言葉、それはそれを発する者の人格、存在そのものを現します。人間の祖が神様の言を疑ったと言う事は、神様への信頼、信仰が失われた事を意味します。そこから罪が限りなく吹き出してきて、人間と世界を汚してしまいました。人間は神様を疑い、拒否したのですから、滅びに向かう他はありませんでした。

そんな人間の罪を贖うために、イエス様はこの世に生まれて来られました。そのイエス様の生涯は、父なる神様に対して、微塵も疑われる事のない全信頼であり、全き信仰でした。神様のご意志が、イエス様の全てであり、イエス様は、人類の贖いと言う苦しみさえ、神様に全信頼して、十字架への道を意志して歩まれました。イエス様はマルコ8章で、イスラエルの北限、フィリポ・カイサリア地方に行かれ、そこでペトロから、

「あなたは、メシアです。」

との告白を受けられましたが、イエス様は弟子たちにペトロのメシア像とは真反対の、真のメシアの使命である、十字架と復活を予告されました。

イエス様はそこから、はっきりと、十字架への道を歩む事を覚悟して、再びガリラヤを通りエルサレムへと向かわれるのです。9章2節には、その途中でペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて高い山に上られました。

『イエスはそこで姿が変わり、エリアと、モーセが現れて、語り合われた』

と記されています。何を語り合われたのかマルコには記されていませんが、ルカの9章31節によりますと、

「イエスがエルサレムで遂げようとして
おられる最期について話していた」

とあります。イエス様はモーセ、エリアと共に、栄光に包まれると、神様に全信頼して、神様の御旨である、人類を罪の滅びから救う、十字架の贖いへの覚悟を強め、3人の弟子たちと共に山を下りて来られました。

一方イエス様の下山を待っていた他の弟子たちは、その間どうしていたのでしょうか。

9章14節を見ますと、

「一同がほかの弟子たちのところへ
来てみると、彼らは大勢の群衆に取り
囲まれて、律法学者たちと議論していた」

と記されています。弟子たちは律法学者達と何を議論していたのでしょうか。互いの立場を主張し、応酬し合っていたのかも知れません。そんな彼らにイエス様は、

「何を議論しているのか」

とお尋ねになりました。すると、17節に、問題の主人公が切実な思いでイエス様に訴えました。

「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。霊がこの子に取りつくると、所かまわず地面に引き倒すのです。すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださいようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした」

と訴えています。

病の子をもつ親にとって、我が子の苦しむ姿を見ることほど辛いことはありません。この父親はイエス様の癒しの御業を伝え聞いて、子供を連れてやって来たのです。でも、イエス様は、山へ登って行かれた後で、不在でした。父親は一刻も早く、息子を治して貰いたい一心でしたから、留守を守る弟子たちに、病の癒しを頼みました。弟子たちには、マルコ6章で、イエス様から2人ずつ組みにして、遣わされた時、

「汚れた霊に対する権能を授けられました。」
「12人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教し、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした」

と言う体験がありました。彼らにはその体験が甦って来ました。古代のことです。人々は自分達に、理解困難な病は、
『悪霊に取り憑かれた、悪霊の仕業だ』
と考えていました。

弟子たちは、自分達にはまだ、この悪霊を追い出す、イエス様からの権能が宿っていると思っていたようです。弟子たちはかつての経験通りにやってみましたが、その病は治りませんでした。そんな弟子たちを見て、律法学者達は、弟子たちを非難していたのかも知れません。イエス様は父親の訴えを聞かれると、19節で、

「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい」

と言われました。

ここにはイエス様の嘆きが記されています。

『なんと信仰のない時代なのか。』

ここで問われているのは、漠然とした信仰ではなくて、具体的に神様の御業を現しておられる、真のメシアである、イエス様への信仰です。

律法学者達は、心頑なで、神様の前に遜って、御心を尋ね求めようとはせず、自分達の考えから、イエス様を、律法社会を揺るがす危険人物と断罪していました。群衆は日和見で、心定まっていませんでした。弟子たちはペトロを代表としてイエス様に対して、

「あなたは、メシアです」

と、告白しながら、そのメシア像は、イエス様とは全く違っていました。

皆、自己中心で、神様が求めておられた信仰はありませんでした。イエス様はメシアとして、既に、人類を贖うために、十字架に向かっておられるのです。もう時間はないのです。特に

身近にいて、イエス様の真の存在が分からない弟子たちに対して、

『いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか』

と彼らの心の鈍さに目が覚めるように、はっきりと云われました。そしてイエス様は、

『その子を私のところにつれて来なさい』

と命じられました。

すると20節で、

「人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び廻って泡を吹いた」

と記されています。現代医学から、この状況を判断する事は私達には出来ませんが、著者マルコは、神様に敵対する、悪の霊が人間を、子供の時から苦しめている事を語っています。

21節で、

「イエスは父親に、

『この様になったのは、いつごろからか』とお尋ねになった。父親は言った。

『幼い時からです。霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や、水の中に投げ込みました』

と、これまでの状況を説明しました。愛する子どもが、身も心も健やかに成長して欲しいと願っていたのに、その子に襲いかかって来た病は、その子の命をも奪おうとしているのです。

ところで、人間の親は、高慢にも、子供を自分の思い通りに育てようとはしますが、思い通りにいかないと不満を抱きます。しかし、子供は、親のものではありません。神様から使命を与えられ、生かされている別人格です。親は、このでんかんの子を持つ父親の様に、子供を真に助けることは出来なのです。まして、我が子を悪の霊、罪から守る事も、助け出す事も出来ません。出来る事と云えば、その子をイエス様のところへ連れて行くことしか出来ません。連れて行かなければなりません。父親はこれまで、あちらの医者、こちらの医者、祈祷師のところへと、噂を聞いては、息子を連れて行ったのです。

でも、これまで何度も、今度こそはと云う期待を裏切られてきました。そんな心の傷から、父親は、イエス様に、22節で、

「おできになるなら、わたしどもを
隣れんでお助けください」

と懇願しました。

すると、イエス様は、23節で、

『『できれば』

と言うのか。信じる者には何でもできる』

とお答えになりました。父親はこれまで、イエス様を、

『神様から力を与えられた治癒者、
特別な力ある人間』

と理解していました。これまで誰も、息子を癒す事は出来ませんでした。しかし、

『神様の力を与えられた治癒者なら、癒してく
れるかも知れない』と思ったのです。

親であれば、そこに10%でも、5%でも可能性
があるなら、それに賭けるものです。

父親はそんな思いで、イエス様に正直に、

『お出来になるなら』

と云ってしまったのです。それに対して、
イエス様は、

「出来ればと云うのか」

と、反問されました。しかし、それは決して
ご自身に対して、

『非礼だ』

と云っておられるのではありません。

『父親に、ご自身への全き信頼、
信仰を求められた』

のです。

父親にとって息子の癒しは、自分の命よりも
大事なことでした。しかし、イエス様は、この父
親にとって、もっと大事なものがある。それは、
イエス様に対する、絶対的な信頼、信仰である
事を知るように求められました。病の癒しは、
肉体の命に関わる大事なことです。しかし、肉
体の病が、癒されただけでは、その子供の永遠
の存在は保証されていません。人間の永遠の
存在を保証して下さるのは、人類の罪を贖う事
のできる、神の御子メシアだけです。イエス様

はこの父親に、ここで、

『ご自身が、神の御子メシアである事を
信じて、イエス様に全信頼して、委ねる
信仰を与えよう』

とされたのです。父親は叫んで言いました。

「信じます。信仰のない私をお助け下さい」

詳訳聖書では、

「父親は心からの、肺腑をえぐる様な、
言葉にならない叫び声を上げて言った。

『主よ信じます。私の弱い信仰を
何時もお助け下さい』

と訳されています。

ところで、私達は、

『イエス様はメシア、身も心も全存在を、
永遠に救って下さるお方である』

と信じる事を、自分の力で信じなければならない
と、思っているのではないのでしょうか。人間はそ
もそも、あの創世記3章で、神様を疑った者です。
父親が、

『お出来になるなら』

と言った心を、何時も持っている者です。私達
は自分の頑張り、努力でイエス・キリストに対する
絶対的な信頼、信仰を持つことは出来ないの
です。信仰とは、イエス様が、呼び掛けて下さり、

『私を信じなさい。信じるものには
何でも出来る』

との招きに、自分の不信仰を振り捨てて、

『信仰の無いわたしをお助け下さい』

と、自分の不甲斐なさを知りつつ、イエス様の胸
に飛び込んで、全存在を委ねる事なのです。

父親はそうして、イエス様に丸投げして飛び
込みました。その様な所に群衆は物見高く走り
寄って来ます。イエス様はそれを見て、

25節で、汚れた霊に向かって、

「ものを言わず、耳を聞こえさせない霊、
わたしの命令だ。この子から出て行け。
二度とこの子の中に入るな」

と命じられました。

「すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけ
させて出て行った。その子は死んだようにな
ったので、多くの者が、

『死んでしまった』

と言った。しかし、イエスが手を取って
起こされると、立ち上がった」
とあります。

イエス様は、人の存在を悪霊から取り戻し、悪
霊をも制する事が出来る、**真の救い主、メシア**
であることが、ここで実証されたのでした。
イエス様は何でもお出来になる。真のメシアであ
る事が実証されました。イエス様は罪に縛られ、
永遠の滅びに向かっていた私達の手も取って、
御救いに入れてくださった事によって、私達も立
ち上がり、命の道を歩める様にして下さいました。
イエス様はここで、

「**信じる者には何でも出来る**」

と言われましたが、それは何でも信じたらその通
りになると言う意味ではありません。イエス様が、

「**信じる者には**」

と言われた言葉には、**誰を信じるのか**が問われ
ています。

『イエス・キリストは、メシア、何でもお出来
になる。 **イエス様に不可能はない**』

と信じる信仰に、イエス様が答えて、

『イエス様が最善に働いて下さる。

イエス様はお出来になる』

と全信頼を寄せて委ねて行くことです。イエス様
を思い通りに動かそうとする事ではありません。

さて、弟子達は、家に入ってから、イエス様に、

「**なぜわたしたちはあの霊を追い出せ
なかったのでしょうか**」

と尋ねました。すると、イエス様は、

「**この種のもの、祈りによらなければ
決して追い出すことは出来ないのだ**」

とお答えになりました。信仰は何時も、
今です。過去にどんなに大きな御業が成され
たとしても、それは人間の力ではありません。
**全て、神様の栄光が現れるために、神様がその
人の神様に対する信仰を通して御業を行われ
るのです。**そこで大切なことは、

『如何にして、何時も、**活ける
信仰に生きるか**』

と言う事です。

信仰とは神様との人格的呼応で続いて行くも
のです。それが祈りです。人は祈りによって
神様と人格的な交わりができ、そこに神様は御
心をお示しになり、力をお与えになります。
弟子たちにはその祈りが無かったのです。

信仰が生きてはいなかったのです。私達も
イエス様と日々祈りにおいて、人格的な交わり、
イエス様に対する、絶対的な信頼に生きている
でしょうか。父親の叫びのように、

「**イエス様、信じます。信仰のない
わたしをお助けください**」

と叫びつつ、イエス様に依り縋って、地上の旅路
を歩み抜いて参りましょう。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は御子イエス・キリストを十字架に
架けてまで、私達を贖い、救い出し、私達の
存在を永遠に保証して下さいますのに、
イエス・キリストにより縋り、賭けて行く信仰の足り
なさを悔いる者です。

信仰の無い私達をお助け下さい。この様な
私達を尚も見捨てず、常に呼び掛けてくださる、
御愛を心から感謝します。唯々主に全信頼し
て、行くものとならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈り致します。

アーメン。